

被害急増！ 生産者を悩ますサルやイノシシ…etc.

集落ぐるみの鳥獣害対策を

奈良県果樹振興センター（鳥獣害対策プロジェクトチーム）

総括研究員

福井 俊男

サル、シカ、イノシシの被害は全国で年々増えています。奈良県でもサルやイノシシが集落に出没して、農作物に被害を及ぼすようになりました。野生動物が集落にやってくるのは、そこにエサがあるからです。高齢化と過疎化で、中山間地域では集落内の放置された竹藪や休耕地が野生動物の隠れ場となっています。さらに、何げなく捨てた生ゴミや放棄された果樹などが野生動物のエサになり、知らず知らずのうちに餌付けし、野生動物を呼び寄せているのです。

集落ぐるみでの対策が力ギ

「最近チラホラと見かけるけど、あんまり食べられてないからまあいいか」。このような対応では、今後さらに大きな被害を被る可能性があります。野生動物は警戒しながらも、したたかに少しずつ集落のエサを食べていきます。その結果、栄養をつけた個体は子供を産み育て、増加して、さらに大きな被害を及ぼします。

そこで、エサになる物の処分が必要になるので、餌付けをしているのと同じです。集落全体でエサをなくさなくては全く効果がありません。山に近いところに畑を作っている人は野生動物の被害を何度も受けるので大変困っていますが、集落の中心部の人や昼間は働きに出ていない人、畑を作らない人には被害の深刻さが分かりません。野生動物に対する知識や被害状況、対策方法を集落のみんな

で話し合っ、集落ぐるみで一斉に実行することが大切です。

サルにとっては生ゴミもエサ

集落にはいろいろなエサ。作物があります。納屋の力ボチャをサルが持つて行きよった。今度見つけたら承知せんで。サルに食べられたくない作物は誰にでも分かります。しかし、集落の中にはサルが食べても誰も怒らない作物もあちらこちらにあります。

収穫後に捨てるサツマイモのつるや摘果した小さなスイカの実、虫の入った栗の実などは畑の傍らなどに生ゴミとして捨てられています。これらは野生動物にとっては十分に栄養価の高い、おいしいエサになります。お墓に供えたお菓子や果物もエサになります。また、稲刈り後の2番穂はイノシシやサル、シカの冬の間の貴重なエサになっています。言いかえれば、これらの「食べても怒



↑ カキの低面ネット栽培

軒よりも高いカキの放任栽培は、集落にサルを引き寄せる餌付け材料となり、侵入逃避路にもなってしまふ。地上1mのところにネットを張り、そこに枝を誘引すると低い樹形ができるので、サルをはじめ、鳥からも守りやすくなる。



↑サルはトウガラシを食べないため、トウガラシを畑の外側に植え、中の作物を隠すようにする。

られない「エサ」をなくすることが予防の基本になります。

集落の周囲はスッキリさせる

里山近くには、放置されて高くなったカキの木があります。持ち主も「あのカキの実は一度も食べたことがない」と話していて、サルのエサになっています。しかも、高い木は侵入するサルの格好の見張り場所であり、いざという時の逃げ場所になっています。したがって、このような高いカキの木を切って低くすることで、サルが侵入しにくい集落になります。

また、集落近くの休耕田にススキなどが繁茂し、笹や竹林が放置されて、イノシシやサルの隠れ場所になっています。そこで、休耕田の草刈りや里

山の下草を刈って見通しをよくすることで、集落内外の境界線がはっきりします。

イノシシは大変に憶病な動物です。麻布大学の江口氏は、雑木林から開けたところに出てくるイノシシが、いったん立ち止まって右左を確認している姿を観察しています。野生動物の警戒心は身を守る重要な本能なので、集落の周囲をすっきりさせて見通しをよくすることが、出没する野生動物の警戒心を高め、侵入を諦めさせることにつながります。

侵入防止柵も効果的

囲いのない畑では、作物はサルやイノシシに簡単に食べられてしまいます。しかし、簡単な柵でも作るとそれが警戒心を与えることになり、畑に侵入しづらくさせることができます。

奈良県ではサルの簡易侵入防止柵「猿落君^{えんらくくん}」を開発しました。各地で調査している実証展示園^ほでは、サルが学習して慣れが生じ、侵入される場合もあります。が、「猿落君」が置かれている環境の違いで長期間侵入されにくい畑もあります。例えば、圃場の近くに耕作者の住居があり、「猿落君」で囲われた畑に入るとすぐにロケット花火で追い払われるようなところでは、サルの警戒心が高く畑に侵入しないのです。侵入しやすい畑は、追い払われることがないか少ない、住居から遠く離れた畑です。

また、野生動物に慣れを生じさせないためには、柵の機能だけでなく、柵の周囲の状況を変えることも必要です。柵の外周に生える雑草や雑木を2



↑サルの目線（地上60～70cm）より少し高い、地上1mくらいまでを目隠しネットで覆い、畑の中を見えにくくする。遮光率の高い資材を使うとより効果的。



↑オスザルは女性や子どもを脅すようになるため、その場合はロケット花火発射装置を使って追い払うとよい。女性が使うとより効果が高い。（枯れ草などの燃えやすい物に向かっての発射は避け、使用後に燃えかすが消えていることを確認する。当然人に向けては使用しない。）



3m幅で刈り払ってすっきりさせ、歩道を作ります。「ここからは人の領域だぞ!」と思わせることで、柵を越えることが少なくなります。

目隠し作物を利用する

サルは五感は人間と同じようなもので、行動する時に最も頼りにするのは視覚です。畑においしそうな作物が見えていると食べたくなるので、それを見せないようにします。背を高くしてトマトを栽培すると、遠くからでも赤く色づいたトマトは見つけやすいため、低く栽培して外側にモロヘイヤやトウガラシなどを植えると隠すことができます。このように目隠し作物を活用して、サルが餌場だと気づきにくい畑にします。

作物で囲いにくいところでは、厚い寒^{かん}冷^{れい}紗^{しゃ}(目隠しネット)などで隠すことも有効です。また、トマトの周りに防鳥ネットを設置しておくとも果実が取りにくいいため、取りやすいほかの物から取り始めます。たとえ「猿落君」を設置していても安心せずに、さらに侵入されにくい畑にする工夫が必要です。

野生動物にとつては、山のドングリも畑のカボチャも単なるエサです。人間が畑で栽培する農作物は、年中あり、栄養価が高く、おいしいエサばかりです。人間に脅されることもなく、ちよつと朝早く、あるいは夜中に行けば自由に食べることができるようなら、こんなにすばらしい餌場はほかにありません。きつとその近くに住み着いてしまいます。野生動物になつたつもりで、集落を、あなたの畑を見直してください。

こんな方法も検証しています!

竹マルチ栽培



耕うん後の畝の上に、3mくらいに切った孟宗竹を並べる。竹をマルチとして、竹の間にサツマイモの苗を植え、針金などでしっかり押さえると、イノシシなどが掘りあげるのを防ぐことができる。

カボチャの立体栽培



カボチャのつるが傾斜の畑の外に伸びて、法面や低い屋根の上に実をつけてサルを誘っている例が多い。立体栽培なら、場所をとらずにたくさんの実が収穫できる。

ナスのボックス栽培



奈良県の谷川氏が開発。フラワーネットでナスを囲い、ネットに枝を結束して誘引すると、サルの被害を受けても根から抜けることがない。側枝が込みあった時はハサミで枝抜きをする。

スイカの受け柵栽培



自家用のスイカを作る場合、高さ1.5m程度のところにネットを張り、15節くらいにつける果実をのせる。狭い場所でも栽培できるうえ、上からネットで囲うと鳥害からも守ることができる。